
モンスターハンター・ロリコンはロリを護るのだ！！

二次創作野郎 初心者ですが何か？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター・ロリコンはロリを護るのだ！！

【Nコード】

N5782I

【作者名】

二次創作野郎 初心者ですが何か？

【あらすじ】

俺は何時も友達にロリコンと言われる。雰囲気がそうなんだそ
うだ……それなら、ロリコンになってやる！！ ロリ小説を書いて
やる！！ 反省はしていない……後悔はしている。

一応残酷描写有りにしてるけど、文才のない俺にそんな表現が描
けるはずないだろう！！

第一話 師匠と弟子の顔合わせ？

ハンターの聖地リガルデの中央に立つ伝説のハンター・リガルデの像の前にこの都市の名所と言ってもよい大きな酒場が有った。

収納できる人数は五千にも及び、地下二階と地上二階の計四階建てになっている酒場は堅固な城壁のような石造りの壁をしており、屋根は東洋より伝わった瓦を使用、地下二階には五千人が二週間は生活できるような備蓄が蓄えられ、リオレウスが襲ってきて三時間間は持つ様に設計されている。

他にも抜け道などがあるが今は良い。そんな大きな酒場には勿論新人ハンターから熟練した超一流ハンターまで居るのだが、ここ十数年そのハンター人口が増加の道を辿っているのだ。

その大きな理由としてあげられるのが月刊狩りに生きるに連載された謎のハンター現る！？ 英雄の再来か？ ハンター界二回目となる幻のリオレウス希少種撃破！！ と言う見出しに始まる一人のハンターの影響だった。

元々子供達はハンターへの憧れが強い。その為にハンターに成ろうとする者が多いのだが、ギルドがこの謎のハンターをプロパガンダとして様々な宣伝をしたのだ。その中でも有名なのが月刊狩りに生きるに連載された小説”孤高のハンター”だろう。

ただのなんの取り柄もない少年が英雄と成長していく様は子供たちに夢を与えたのだ。

しかし、これにはデメリットもあった。それはハンター死亡率が急激に上がったこと。これによりハンターを疎む勢力に付け入る隙を与えるかもしれない……。

そんな考えからできたのが、ハンター養成学校と卒業生を対象にした師弟制だ。

そして今日ハンター養成学校の第一回卒業式+師弟制に伴って行われる師匠と卒業生の初顔合わせが酒場で行われていた。

「これで第一回ハンター養成学校卒業式を閉式する」

何時もならお祭り騒ぎのように煩い酒場なのだが今日は肅々と卒業式が行われた。

何時も並べられている木製の丸テーブルは何処かに片付けられ、本来丸テーブルの周りに備え付けられている椅子が卒業生たちの椅子として五列に並べられていた。

壇の何時もなら歌姫やら芸者が演技を披露する場に立っていた教官やらハンター養成学校の校長が退場していき代わりに数十人のハンターを携えたギルドマスターと呼ばれるこの都市のギルドの主の様な存在の老人が入ってきた。

六歳児と同じくらいの身長で、杖をつかなければ歩けないくらいに腰は曲がり足は弱っているのだが、その目はまだ活気に富んでいる。竜人族の老人だ。

彼はコツコツと杖を鳴らしながら壇上の中央にやってきた。後ろに一列にハンターが整列する。彼らはこの中で唯一防具で身を包んでいる存在だ。これには憧れや希望を卒業生や観客に見せる目的がある。

「オホン！ これより諸君らは卒業生二人に我がギルドの精鋭を師匠として付ける。将来は彼らと肩を並べる存在になることを祈ろう……一日でも早く一人前のハンターになることを祈ろう！ 彼らに神の祝福を」

そう言い括って老人は舞台の袖へと消えていった。換わるようにハンター達が前に一步踏み出る。そしてそれを見た後にいつの間にか司会役をしていた教官が舞台に姿を現していた。

「これより、師匠となるハンター達に番号の書かれたプラカードを持ってもらう。卒業生諸君は事前に配られた番号のプラカードを持ったハンターの後ろに並んでくれ」

言うと同時にハンター達は目の前に置かれていたプラカードを持

ち始めた。と言つても、上に掲げるようにはなく剣を地面に刺して柄頭に両手を重ねるような恰好でだ。

そして最初に決めていた通り端から順々に壇上に登り師匠となるハンターの後ろに並んでいく。

「それではこれより退場します。閲覧席にいらつしやる皆様はハンター達の門出を拍手でお祝いください！」

パチパチとアリーナから拍手が聞こえた。それは吹き抜けになっている二階の一般観客席。ハンター養成学校とは何の関係もない民間人から始まった拍手だったがそれは波紋のように瞬く間に広まった。

危険なハンター業に否定的な保護者ですら拍手をしてしまうほどに……それほどに卒業生の顔は晴れ晴れとしたものなのだ。

その為に子供の晴れ姿を見た親は拍手してしまつたのだろう……たとえ命に伴う職業であつたとしても子供が頑張つて頑張つてそれで辿りついた最高のものに辿りついた……そんな喜びが表情にアリと浮かんでいるのだから。

ハンター養成学校の卒業生は師匠のハンターと酒場からすぐのところに造られているハンター用宿舍のチーム用に建てられたコテージの様な場所があり、そこに彼らは集まっていた。

そこからは師匠のハンターを先頭に師弟制の約二年間をお世話になるコテージを目指した。それにはチーム内の結束力を高める意図がある。四畳ほどの狭い部屋が三つに八畳ほどのリビング、キッチンやトイレ、お風呂、それにモンスターの素材や鉱石を保管する倉庫が地下に設備された木造の家だ。

各部屋や地下倉庫には事前にハンター養成学校から運び込まれた卒業生の持ち物や師匠のハンターの持ち物がある。

総勢数十人の師匠ハンターの中で男性ハンターでは唯一弟子の二人共が女子と言うカームは、早速リビングに弟子のハンター二人を

集めていた。

「ハア……メンドクせえ」

そして開口一番にそういうとグデーツと木で出来た机に体を預ける。黒髪の髪がカーテンのように整った顔立ちを隠し、防具を脱ぎインナーの姿となったために惜しみなく露出される引き締まった筋肉も歴戦のハンターを思わせるのだが、この発言と態度ですべて半減だ。

「貴様！？ 私らの師匠ならそれ相応のやる気を出さんかあ！！
大体貴様みたいな軟弱そうな奴ハンターとは認めんぞ？ ハンターならハンターらしく厳格で市民を絶対に守ると言う気概を見せんか！！」

バンツ！！ と机を叩いた衝動でハンターとは思えない白い織手が赤くなり、水色の二つに束ねられた腰まで伸びる神がフワツと宙を舞った。新人ハンターリナはフーツフーツ！ と鼻息を荒くしてそんなことを言った。

その横では同じく新人ハンターのサンが隣のリナには興味がないと言った感じに師匠であるカイムを感情の籠ったように感じないある意味ゾツとするほどに凍てついた瞳で見つめていた。

まるで人形のように身じろぎ一つしない体は人形のように、唯一地についてない足が振り子のようにプラプラと揺れていた。色素の薄い紫色の髪は目を半分ほど多い隠し肩の辺りで切られている。

「お前もこのグータラ親父に言っつてやれ！！ 確りとハンターしてくれないと困るのだと！！」

それにサンは微かに頷くと口を開こうとしたがその前にカイムがバンツ！ と机を叩き跳ね起きた。

その双眸には怒りの炎が灯りリナを睨みつけている。そして一言罵倒するように言い放った。

「俺は二十歳だあああ！ お兄さんと呼べえ！！ ……お兄ちゃん
又は兄さんでも可だ」

言っつてまたグデーツと寝そべる。リナは何が来るのかと身構えて

いた分どこかやるせない気分になり「ふーぎーけーるーなー!!」
と怒りを露わにして掴みかかる様に机の上に身を乗り出す。

しかしそれを制止するように肩を持つて引き留めたサンが私が言うと言った感じにカイムのほうを向いた。

「……お兄さん……ほんと「もう一度言ってく」くたばれ変態!!」
」

サンの言葉を遮る様にカイムがそれを遮る様にリナが続けざまに言葉を被せた。それによって言葉を遮られたサンは流れるような動作でどこからかナイフを取り出すとダンッ！ 机に突き刺す。

半分以上埋まったそれはどう見ても木製の机を貫通していた。それに恐怖を感じた二人は息の揃ったコンビのように身を同時に引いた。

「……お兄さん、力、見ない……信頼ない」

断続的に抑揚のない声で紡がれた言葉はあなたをまだ私の師匠と認めてはいないと言う拒絶が有った。それに便乗するようにリナもそうだそうだと頷いている。もっともリナはそこまで強い拒絶を感じ取ったのではない。ようは力を見せてくれと言ったと思っている。そしてそれに対しカイムはハーツと溜息を吐いた。

「だから、師匠なんて面倒になるから嫌だつて言ったのによ……」

言いながらも顔だけ二人のほうを向けるとダルそうにしかし何処か真剣な表情で二人には聞こえないだろう小さな声でつぶやいた。

「舐められたら駄目だし、リオレウス辺りを狩っておくか？」

その言葉は彼をよく知らないものが聞けば彼のプライドから舐められるのが嫌だからと思うだろうが、違う。カイムは弟子の二人が自分を舐めたまま修行に入っても自分の教えを守ってくれるとは思えないのだ。そしてそれは、二人のハンター人生に関わってくる。

師匠が教えるのはなにも狩りの技術だけではない。無法者とも呼ばれるハンターだがその中にも礼儀作法というものが有る。それを教えるのも師匠の大切な役目なのだ。

「お前らの武器はなんだ？」

「いきなり何を言い出すのだ？ まさかふ抜けたお前が狩りに連れて行ってくれると言うのか？」

「ん？ そのつもりだが嫌なのか？ 舐められたままって言うのは嫌だからな……師匠の偉大さを教えてやるよ！」

心底なめきっていたリナはまさか自分の实力を見せると言うとは思っていなかった目が点と言った感じに口をだらしなくポカーンと開けてカイムを見ている。

「……ふっふん。どうせイヤンクックなのだろう？ そんな奴私でも狩れる！！」

「おいおい……あんまりハンターをなめんなよ？ これでも俺は師匠なんだからな！！」

「貴様を師匠と認めていない！？ 勝手に師匠面するな！ 大体男と可憐な乙女二人が同じ家に住むなんて……」

そこまで言っただけで現状を理解したようにボンツと顔を真っ赤にさせた。

「おっお前！ まさか師匠と言うことを理由に私たちにあんな事やこんな事を？ このロリコン！！ お前なんてリオレウスの火球に焼かれてしまえ！！」

顔を真っ赤にしてそう言っただけで体を隠すように腕を交差するとさらに糾弾しようとして、突如来訪者を告げるベルの音に無残にも止められてしまった。

「客か……後言っておくが俺はロリコンじゃないから安心しとけ。

加えて言えば弟子にそんなことを強要するつもりも毛頭ない……オチビサン！」

「んな！ 取り消せ！ これでも養成学校では後ろから数えて三番目だっただぞ！」

「……女子、五人」

「つくつははは！ それって前から三番目じゃねえか？ それに見ていた感じだと後ろから二人目の奴とも大分身長差有ったじゃねえか！？」

「ウガアアア！！」

さつきまで顔を赤くしていたリナは別の意味で顔を真っ赤にしてカィムを追いかけ始めた。そして奇妙な二人の追いかけっこが始まった。カィムはその俊敏な動きでリナを翻弄し、リナは猿のように身軽な体を利用して追いかける。

そんな二人をしり目にサンは玄関へとトコトコと行き扉を開けた。

「……………あなた、は？」

「ふおっふおっふお……………ギルドマスターじゃよ。カィムは居るかね？」

さつきまで卒業式に出席していたギルドマスターの老人はお伴を一人もつけずに、身長の高いサンを見上げるようにする。その顔には好々爺と言うにふさわしい微笑みが皺だらけの顔に刻まれていた。そこへ、追いかけっこしていたカィムがリナを荷物でも担ぐように肩の上に抱いて着た。足をバタバタさせるたびに絶賛放映中！！リナのパンツ・シマシマ編！！となっているが本人は全く気付いた様子がない。

白い付け根が見え隠れするさまはチラリズムなのか？ たまたま通りかかった男は鼻血を吹きだした。

「ギルドマスター……………何か御用ですか？」

言葉と顔は真剣なのだが、ジタバタとするリナの踵がバゴンツと鼻っ面にあたり鼻血が噴き出てしまう。「何すんだ！ クソがきやああああ！！？」というカィムの叫び声を無視してギルドマスターは話し始める。因みにパンチラ率上昇中のリナは「降ろせ！ この変態ロリコン！！」と叫びまくっていた。

「実はのお……………近くの丘におそらく上級と思われるリオレウスが出たようじゃ。君にはそれを狩ってきて貰いたい。馬車は第七のを使ってくれ、支給品も馬車の中に用意しておいた。これは緊急クエストじゃ。急いでくれ」

「了解しました」

ギルドマスターはその返事に頷くとコツコツと杖を鳴らしながら

出て行った。いまだに鼻血を流しっぱなしのカイムはこちらも絶賛パンチラ中のリナと無表情のサンを伴って家の中に入る。

サンとしてはギルドマスターは先程見て知ってはいたが一介のハンターのところに来るなど思ってもみなかったのか表情には出ていないが啞然としている。もしかしたらお兄ちゃんはずいハンターじゃあないのか？ と。因みに二人は兄妹の関係ではない。

「そんで二人の得意な武器はなんだ？」

さっきまでと同じように椅子に座っている三人。ただ違うのはサンがボソツと「……パンツ、見えてた」との言葉に顔を真っ赤にしたりナだけだ。カイムはグデーツと机に体を預けている。

「早く言ってくれよ……それから準備するんだから」

「……ヘビィーボウガン、リナ、ランス」

断続的で聞き取りにくい声を聞くとカイムはよっこらしよっ！

と言って立ち上がった。「やっぱり爺だ！」と騒ぐリナを黙らせると自室へと入る。消える際にカイムは「お前らも準備しとけよ」と言い残して。

「……行く？」

「ん？ ああ、わかった。それにしてもサンは少しガードが甘いぞ？ いきなりお兄ちゃんなどと……ロリコンならどうするつもりだ！？ ……まあ、あいつは違うみたいだが」

「……私はまだ信じれない」

「……わかってる。ゆっくり心を開いていけば良い」

「……うん……ありがと、リナ」

「べつ別に礼を言われるようなことではない！ それより、早く着替えないと遅いぞ？ とか言ってロリコンが私たちの部屋に入ってくるぞ！ 早く着替えよう」

感謝されたのが恥ずかしいのか、リナは顔を真っ赤にするとサンの背中を押して部屋へと行こうとする。サンは冷静に「……私の部屋はこつち」と突っ込むと「あはは……そうだったな。じゃあ後でな！」と逃げるようにリナは自分の部屋に駆け込む。一人リビング

に残ったサンはすでに扉の向こうにいるリナに向かってもう一度ありがとうと言うと、自分の部屋に入って行った。

「よし！ 準備できたか？ てめえら！！」

砂漠の暴君と呼ばれるディアブロス、それも亜種に属する黒いディアブロスの素材を使った防具を着込んだカイクが怒鳴り声をあげた。

肩の上には大きな角が乗っかり、荒々しい岩肌のような甲殻が全身を包む。しかし動きはスムーズで、軽そうでもあった。関節などに目立った弱点と思われる部分が無いにもかかわらず、その動きやすさを実現するのがモンスターの素材のすごいところで、他にも耐熱やモンスターの叫び声だけを遮断する機能なんかもついていた。

背中には天井に刺さりそうなほどに長い銀色に輝くランスを背負っていた。

「本当にハンターだったのだな……」

呆けるような口調で卒業生に配られるハンター装備をしたりリナが呟いた。背中には骨を削ったようなランスが刺さっており、見た目からはランス一頭も倒せそうにないか弱い少女がどうにか変な武装をしているくらいにしか思えない。

その横にはリナと同じハンター装備だが、ガンナーように指の関節をより動きやすくしたり弾を入れておくポケットの様なものやボウガンを固定する所などがついた装備で身を固めたサンが居た。

サンは背中にこれまた骨で作られたボウガンを背負い、パワーバレルを付けて飛距離と威力を増したヘビーボウガンを背負っている。他にも、なぜか肉焼きセットと塩コショウで味付け&保存の生肉を三つ両手で持っていた。

「……行く」

「……いや、突っ込ませてくれ。何で生肉と肉焼きセットを持っているんだ？」

「……携帯食料、や」

「サンは養成学校では美食家を通っていたのだ。ギルド支給の携帯食料など一口食べただけで吐き出すほどに肥えた舌をしてる」

「てめえ！ 何でハンターになっっているんだ！！ 食の雑誌でも出してろや！！」

「……食べる、趣味」

「昔っからそう言われておるが、趣味と仕事は一緒にしたくないらしい。それにサンはハンターになったのもモンスターの肉を食うためと言っていた」

「……ややこしい弟子を持つちまったな。まあ良い……時間が惜しいから早速第七の馬車に行くぞ」

そう言っただけでカイルは歩き出した。

後を、二人が付いていく感じた。二人は今まで養成学校の馬車を使っていたためにハンターギルドの馬車の位置など聞き伝えでしか知らなかったために、カイルの後ろを歩くしかない。そうでなければ先に行ってハンターギルドの運営する馬車と養成学校の馬車の違いをいろいろと見比べたかった。

馬車乗り場は東西南北にある四つの正門の横にそれぞれついてあり、東から時計回りに北までにそれぞれ四つの乗り場がある。だから第七乗り場は西にあるという計算だ。

「ほら、ちゃんとしてこい！ 置いていくぞ！！」

「言われなくても、わかってる！！」

そう返すものの恥ずかしいのかりナはカイルから少し離れたところを歩いている。おそらく下級のディアブロス亜種だろうがそれでもディアブロスだ。一説によればその突進を受ければリオレウスすら一撃で仕留められると言われる程に凶暴で攻撃力の高いモンスターなのだ。

その有名度は、リオレウス、リオレイアに次ぐかもしれない……と言つのも月刊狩りに生きるの小説孤高のハンターの装備が黒ディアブロスなのだから。

銀色のランスもそうだ。その為に様々な目で見られているのだ、カイクは。

ある者は珍しそうな、ある者は馬鹿にしたような、ある者は生温かい目で……その視線に自分もさらされるのが耐えられないのか、リナはカイクから距離をあけていた。

第一話 師匠と弟子の顔合わせ？（後書き）

更新は遅いです

休止

作者の一身上の都合から更新ストップします。

まだファンが少ない……っていうかいらない？ 時点での決断にしたいと思いました。主な理由としてはキャラ設定がもうわけわからなくてボロボロだからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782i/>

モンスターハンター・ロリコンはロリを護るのだ！！

2010年10月8日14時40分発行